

## 西條八束先生を偲ぶ

西條先生からは研究者としての姿勢や気概、社会に対する鋭い視線など、多くのことを学んだ。もっとも印象に残っているのが、2001年2月4日付で先生直筆の手紙を頂いたことである。じつは前日の朝日新聞「声」欄に私が「事業総点検し前島見直しを」と題して投書したが、すぐに丁寧な手紙を書いてくださった。この頃はよく投書をしてきたが、あまり「反応」がないので本当に嬉しかった。先生からの手紙は大切にしておいた。

愛知県は中部国際空港の埋め立て用として計画を進めていた幡豆町の土砂採取を断念した。それにあわせて、「厳しい財政事情が続くなかで、『前島』開発も傷が浅いうちに大胆に見直すべきでないか」と主張した。この投書に対して、先生は「私が感じていたことを、それ以上に具体的な数字をあげてお書き頂き、本当にうれしく、ありがたく感じました」「環境問題で科学的な発言をしていくためには、自然科学系と人文科学系の両面が必要なことを痛感しております」と書いておられる。手紙に同封されていた『沿岸域』という雑誌の「沿岸域の環境保全における科学的知見の重要性」という基調論文からも、先生の伊勢湾・三河湾、幡豆の開発などに対する自然科学者としての厳しい姿勢が伝わってくる。

私は中部国際空港や愛知万博などの開発に対して、主に地方財政という分野から調査研究してきた。西條先生のように長年にわたる緻密な調査にもとづく分析ではないが、一人の研究者として住民団体の皆さんとともに活動し、積極的に発言してきたつもりだ。とくに「前島」開発については、住民訴訟の原告側証人として名古屋地裁で証言したこともある。貴重な伊勢湾を埋め立てて造成した「前島」の現実を見ると、先生の科学的知見の重要性があらためて思い知らされる。

これからも先生に学びながら、維持可能な社会をめざして科学的知見を広く発言していきたい。先生もよく「声」欄などに投書されていた。最近はさぼりがちなので、先生を思い出しながら投書を「再開」してみたくなった。

西條先生、本当にありがとうございました。

2007年11月15日